

2023 年度

＜文 学 部＞
小 論 文 問 題

注 意 事 項

- 1 問題冊子は、監督者が「解答始め」の指示をするまで開かないこと。
- 2 問題冊子は全部で7ページ、解答用紙は全部で3枚、下書き用紙は2枚である。脱落のあった場合には申し出ること。
- 3 解答用紙の各ページ所定欄に、それぞれ受験番号（最後のページは、左右2箇所）、氏名を必ず記入すること。なお、解答用紙は上部で接着してあるので、はがさず解答すること。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入すること。
- 5 解答は、「横書き」にすること。
- 6 解答の字数制限は、句読点や記号を含めて数えること。
- 7 解答以外のことを書いたときは、該当箇所の解答を無効とすることがある。
- 8 問題冊子の余白は下書きに使用してもよい。
- 9 問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

補 足 説 明

科目名： 後期日程 文学部 小論文問題

《補足箇所》 3 ページ 上から 16 行目

以下の漢字の読みは、次のとおりである。

たと
喩えられるだろう。

(余 白)

問題

次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

人間はあれこれと後悔する。こんな連載、引き受けなければよかった、等々。では猫はどうか。いや、別に猫にかぎらない。人間以外の動物は、後悔をするのだろうか。

猫が鳥に襲いかかる。逃げられる。でも、惜しかった。そのときその猫は、「もう少し忍び足で近づいてから飛びかかればよかったにゃ」などという日本語に翻訳できるような仕方では後悔するのだろうか。私の考えでは、しない。いや、できない。猫は、そして人間以外の動物は、後悔というものを^な為しえない。なぜか。

後悔するということは、事実^に反する思いを含んでいる。「ああすればよかった」というのは、そうしなかったという事実^に反する思いであり、「あんなことしなければよかった」というのはそんなことをしてしまったという事実^に反する思いである。ならば、事実^に反する思いをもつというのは、どのようにして可能になるのだろうか。

*

ひとつ用語を導入しておきたい。『論理哲学論考』においてウィトゲンシュタイン（注1）は、可能な事実の総体を「論理空間」と呼ぶ。そこには、現実^に起こった事実と現実には起こらなかったけれど起こりえたという事実が含まれている。ここで、「起こりえた」というのは目いっぱい広くとっていただきたい。私は現実には大学の教員をしているが、もしかしたら大リーガーであったかもしれない。もちろんそれがふつうの意味では「ありえない」ことなのは私が一番よく承知している。だが、能力的に実現不可能であっても、思考不可能ではない。「もし私が大リーガーであったなら」と反事実的な想像をすることは別に矛盾ではない。私が大リーグでホームランをばかすか打つ。どこに矛盾があろうか。

ここで捉えられる「可能性」は、われわれが捉えうる最も広い意味での可能性、つまり論理的可能性にほかならない。それは論理的に矛盾しないかぎりには可能であると言われる。そんな可能性の総体、それが論理空間である。現実の世界というのは論理空間の中のごく一部分にすぎない。実際に起こっていることを取り巻いて、現実化しなかった可能性が広大に開けている。だが他方、われわれはただこの現実の世界を生きるしかない。ここに問題の根っこがある。

われわれが会おうのはすべて現実の世界である。可能性の世界などというものがどこかにあるわけではない。へたをすると「思考の世界」などというものを想定し、しかもそれを「心の中」に位置づけたりしたくなるかもしれない。だが、見まわしてほしい。部屋の

中、あるいは窓の外。見えるのは現実には起こっているさまざまな事実である。「心の中」(実にいいかげんな言葉だと思うが、いまはそれには目をつぶって)を探ってみてもよい。軽く頭痛がする。それも現実には起こっている事実である。あれやこれや考えている。非現実的なことを考えているかもしれないが、そう考えていること、それは現実の事実である。文字を書きつける。声に出さずに語る。イメージを思い描く。あるいは脳がある状態になる。すべて、現実には起こっている事実にはほかならない。

私に与えられているものは現実の事実だけである。しかし私は現実を取り巻く可能性の総体たる論理空間を理解している。だとすれば、この現実を元手に、論理空間の理解が形成されるのでなければならない。それはどのようにしてか。

*

なによりもまず、世界が分節化されていなければならない。例えば白い犬が走っているという事実を、われわれは、〈白い〉という性質と〈一匹のあの犬〉という対象と〈走っている〉という動作といった要素から構成されるものとして捉えている。こうした構成要素を取り出すことを「分節化」と言う。

われわれはすでに分節化された世界に生きている。分節化されていない世界とは、いわば徹底的な抽象画の世界にも喩えられるだろう。そこでは、あらゆる対象の輪郭が失われ、それら対象がもっていた意味も消え去る。そんな世界。他方、われわれが生きている世界はそうではない。われわれは、〈あの犬は白い〉という事実から、〈あの犬〉という対象と〈白い〉という性質を分節化し、あるいはまた〈机の上にパソコンがある〉という事実から、〈その机〉と〈そのパソコン〉という対象と〈…の上に…がある〉という関係を、その事実を構成する要素として分節化している。あまり細かい区別をしてもしょうがないので、性質と関係をあわせて「概念」と呼ぶことにしよう。われわれは世界をさまざまな対象とさまざまな概念に分節化して捉えている。

かりに世界が分節化されていなかったなら、反事実的な思いも不可能となるだろう。犬が走っているという事実を前にして、その犬が逆立ちするという反事実的なことを考える。そのような思いが可能になるのも、〈その犬〉という対象と〈走る〉という概念が別々の要素として捉えられているからである。その犬はなるほどいまは走っている。しかし、走っている状態しかありえないのではなく、歩いたり寝ていたり、あるいは逆立ちすることも、考えることができる。それは、〈その犬〉という対象を〈走る〉という概念以外の要素(〈歩く〉〈寝る〉〈逆立ちする〉等々)と組み合わせることが可能だということにほかならない。そのためには、〈その犬〉という対象と〈走る〉という概念は別々

の構成要素として区別されていなければならない。つまり、論理空間を開くには、世界が対象と概念に分節化されていなければならないのである。

ただし、ここでもう少しことがらを正確に捉えておきたい。いま述べたように、論理空間を開くには世界が分節化されていなければならないが、逆に、世界が分節化されているためには論理空間が成立していなければならないのである。

机の上のパソコンを考えてみよう。なるほどいまは机の上にあるが、可能性としてはそのパソコンはさまざまな場所にありうる。例えば床の上に置く。あるいは部屋の外に持ち出す。そこで、われわれがそうした可能性を理解していないとしてみよう。そのとき、そのパソコンはその机の上にはしかありえないものになってしまうだろう。そのパソコンとその机が分離されることを、われわれは想像することさえできない。そうなってしまったら、それはつまり、そのパソコンと机は分離不可能（しかも論理的に分離不可能）ということであり、それはもはやさらなる要素に分解不可能な一つの対象ということになる。

机の色についても同じように議論される。いまはその机は茶色だが、もしその机が茶色以外の色である可能性をわれわれが理解していないのだとすれば、その机は茶色でしかありえないことになる。そのとき、その机と茶色という色は論理的に分離不可能となり、それらを別々の要素として分節化して考えることは不可能である。

さらにこの議論は、パソコンと机に対してだけでなく、机と床に対しても成り立つ。いま机は床の上にあるが、われわれはそれが他の場所、例えば外の路上にあるといった反事実的な可能性も了解している。そこでもしそのような反事実的な了解がないのであれば、その机とその床は論理的に分離不可能となり、分節化されていないことになる。かくして、パソコンと机が癒着し、机と床が癒着し、床は建物と癒着し、建物は地面と癒着して、ついには宇宙全体が論理的に分離不可能となってしまうだろう。

世界から対象と概念を分節化して捉えるためには、その対象と概念が他のさまざまな対象や概念と組み合わせられる可能性が理解されていなければならないのである。したがって、世界が分節化されるためには論理空間が成立していなければならない。このことと、先に示した「論理空間が成立するためには世界が分節化されていなければならない」を併せるならば、つまり、①論理空間の成立と分節化された世界の成立は、どちらが先というものではなく、厳密に同時なのである。

*

さらに、論理空間の成立のためには、それゆえまた分節化された世界の成立のためには、われわれは分節化された言語をもっていなければならない。

言語にはさまざまな働きがあるが、その中の重要なものは、ものごとを表現するという働きである。例えば、「白い犬が走っている」という言葉は〈白い犬が走っている〉という事実を表現する。しかるべき場面で「あの犬」と言えば、それはある一匹の犬を表現する。あるいは「白い」という語はある範囲の色を表現している。逆に、ものごとを表現する働きをもったものはすべて「言語」と呼ぶことにしよう。われわれはふつう「言語」というと音声言語と文字言語だけを考えがちだが、言語の働きをもったものはさらにさまざまにある。例えば種々の図案で表わされた標識なども言語であり、鉄道路線図も言語であり、設計図のような図面も、それが実際に作られるべきものを表現しているという意味では言語である。あるいはまた、飲食店に置かれてある食品サンプルも、実物の代用品という意味で言語と言えるだろう。

もし、われわれの世界から、これら言語と称すべきものたちのいっさいがなくなったとしたら、どうだろう。私の考えでは、そのとき世界もまた未分節の状態になるしかない。そのことを示すために、「世界は分節化されているが、分節化された言語はもっていない」と仮定してみよう（背理法（注2）の仮定）。

先ほど論じたように、〈机の上にパソコンがある〉という事実が〈その机〉〈そのパソコン〉〈…の上に…がある〉という構成要素に分節化されているためには、それらの要素が〈机の上にパソコンがある〉という組合せ以外の組合せ、例えば〈パソコンの上に机がある〉といった組合せを作りうるものでなければならない。さもなければ、〈机の上にパソコンがある〉という事実はそれ以上分節化されないひとかたまりとなってしまうだろう。だが、いま、いっさいの言語がないと仮定している。〈その机〉や〈そのパソコン〉という対象、および〈…の上に…がある〉という概念を表現してくれる言葉がない。だとすれば、その対象や概念そのものを組み替えてみるしかない。つまり、実際にパソコンの上に机を置いてみるしかない。そんなことをしたらパソコンが壊れるだろうということは措いておくとしても、根本的なことは、それはもはや現実のことであり、たんなる可能性ではないということである。

やはり、どうしたって言語がなければならない。②言語がなければいっさいは現物となる。そのとき、現物に対してさまざまな組合せを試してみたとしても、それらはすべて現実の事実になるしかない。それゆえ、反事実的な可能性を開くにはどうしても現物の代理物たる言語が必要なのである。われわれはそうした言葉をさまざまに組み合わせる。それが、さまざまな可能性を表現する。最初に述べたが、可能性の世界なるものがどこか（心の中であれイデア的な世界にであれ）にあるというわけではない。言語もまた、現実の一

部にほかならない。食品サンプルは心的な何ものかでもイデア的な何ものかでもなく塩化ビニールで作られており、音声言語は空気振動であり、文字言語は現実には書きだされたインクの染み等である。それゆえ、言葉を用いているときにも、われわれは決してこの現実世界の外に出て行っているわけではない。われわれは現実には生きるしかない。この現実の中で、空気振動やインクの染みや塩化ビニールの塊を適当に操りながら、さまざまな可能性を表現するのである。「白い犬が逆立ちして走り去る」という文字模様を紙上に描けば、それは白い犬が逆立ちして走り去っていく可能性を表現している。可能性とは、このように、言語が表現するものとしてのみ、成り立ちうる。それ以外に可能性の生存場所はない。

可能性を開くために必要とされる言語は、分節化されていなければならない。さもなければ、言語においてさまざまな組合せを試すことができないからである。「机の上にパソコンがある」という言語表現があり、それが「机」「パソコン」「…の上に…がある」という語句に分節化されているからこそ、インクの染みにおいて「パソコンの上に机がある」という組合せを試すことができる。そしてそれが、〈パソコンの上に机がある〉という非現実の可能的な事実を表現する。われわれはこうして、そしてこのようにしてのみ、可能性を理解するのである。

論理空間・分節化された世界・分節化された言語、これらはすべて厳密に同時に成立する。それゆえ、言語をもっていない動物は可能性の理解をもたず、分節化された世界にも生きていないことになる。言語をもっている動物でも、それが分節化され、さまざまな組合せを試せるような構造（構文論的構造）をもっていない単純な言語にとどまるかぎり、それは論理空間を開く力をもっていない。

かくして、猫は後悔しない。人間だけが後悔する。

(注1) ウィトゲンシュタイン——1889年に生まれ1951年に没した、主にイギリスで活躍した哲学者。『論理哲学論考』（1921年）は彼の主著の一つ。

(注2) 背理法——ある判断を否定し、それと矛盾する判断を真とすれば、そこから不条理な結論が導き出されることを明らかにすることによって、元の判断が真であることを示す証明法。

(出典：野矢茂樹、『語りえぬものを語る』、講談社学術文庫、2020年。ただし作問に際し、小見出しを削除して*に置き換えるなど、論旨を変えない範囲で部分的に改変した)

第1問 筆者は下線部①で、「論理空間の成立と分節化された世界の成立は、どちらが先というものではなく、厳密に同時なのである」と述べている。「論理空間」と「世界の分節化」の意味を明確にしなが、下線部①で述べられていることを本文の内容に即して300字以内で説明せよ。(120点)

第2問 下線部②の「言語がなければいっさいは現物となる」とはどういうことか。本文の内容に即して200字以内で説明せよ。(80点)

第3問 反事実的可能性を想像することは、何に対して、どのような意味をもつと考えられるか。あなたの考えを500字以内で論述せよ。(200点)